

Title	東アジア民間説話の比較研究
Sub Title	
Author	伊藤, 清司(Ito, Seiji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1991
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.61, No.1/2 (1991. 12) ,p.201- 211
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文審査 彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19911200-0201

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

〔論文審査〕

東アジア民間説話の比較研究

伊藤 清司

内容の要旨

本論文は中国大陸と朝鮮半島およびその隣接地を含む東アジアの民間説話との比較研究によって、わが国の代表的な民間説話の成立に関し、新しい知見を述べたものである。

本論文は三章から構成されている。第一章では農耕文化に関連する主要な民間説話の比較研究を、続いて第二章では金属文化に関係する代表的な民間説話の比較研究を試み、それぞれ定説化している発生に関する旧説を批判し、いずれも外来説話であることを明らかにした。ついで第三章では農耕・金属両文化関係説話以外の代表的な三つの民間説話を case study としてとりあげ、そのいずれもがわが国内自生の説話でないことを指摘し、さらにそれらがわが国社会に受容され、民間に伝流するに至った諸相を明らかにした。以上を通じて、わが民族固有の信仰や習俗あるいは神話を母胎として成立したとする柳田国男以来の民間説話の成立に関する学説を、研究上の方法論をも含めて批判し、東アジアの説話との比較研究という視点によって、

わが国の民間説話成立の研究に新しい展開が可能になることを論じた。

さて、冒頭の「序にかえて」において、わが国における民間説話の発生論的研究の動向を略述し、その方法上の問題点を指摘した。まずわが国基層文化の形成の歴史的・地理的な特色に触れ、中国大陸や朝鮮半島からの多数の遷徙・移住者、および彼我の交渉、あるいは伝来文化のわが国における位置について述べ、そのうえに立つて、一国民俗学の枠内にとどまりがちなこれまでの方法論上の問題点を指摘した。

第一章「農耕文化と民間説話」は五つの論文から構成されている。まず、第一の「雲貴高原の民間説話」では華南の雲貴高原およびその東方の江南地方はいわゆる照葉樹林帯に属し、西日本や朝鮮半島南部と風土的共通性とともに文化的類似性のあること、他方、東アジアの歴史は漢民族の膨張史、漢文化の発展史的側面をもち、かつて長江流域およびその以南に居住していた非漢民族はこうした歴史の動きの中で漢族社会への同化か、さもなければ僻地であった雲貴高原その他の異郷への遷徙移住を余儀なくされ、その一部は日本列島にも及んでいた可能性について述べた。そのうえに立つて自然環境のきびしい雲南貴州の山岳地帯に居住し、比較的漢化をまぬがれた非漢民族の中には民族固有の文化を保持してきた人びとが多いこと、彼らの伝統文化はわが国の基層文化と共通するものが少なくないことをあげ、したがって空間的には隔絶の地であるが、とくに雲貴高原およびその周縁地域に生活する人びとの伝承する民間説話は

わが国の民間説話の成立を論じらううえで、比較研究の対象とすることに格別な意義のあることを述べた。そして具体的事例によつて比較を行ったが、ここではとくに五大昔話の代表とされ、わが国独特な昔話と見なされてきた花咲爺を中心に論じた。筆者はかつて『昔話花咲爺の源流』において、この民間説話がわが国固有の小さな子神信仰を母胎として生まれたとする定説化した柳田国男説を批判し、古来、犬祖神話や犬と農耕にかかわる信仰や習俗の行われてきた雲貴高原およびその周縁地域に、犬を主人公とする狗耕田・兄弟分家型説話がとくに多く分布していることを述べ、その型の説話がわが花咲爺の祖型であつて、これらは農耕起源神話の系統をひく説話であることを指摘した。ところがその後、吉田敦彦・古川のり子らは花咲爺はハイヌヴェレ型神話である記紀のオオゲツヒメ殺し・ウケモチノカミ殺し神話と同系統の神話であり、すでに縄文時代に存在していたハイヌヴェレ型神話が記紀の体系神話にとりいれられる一方で、幾多の時代的変容を遂げながら昔話花咲爺が成立したとする新しい説を提示した。そこで本論文では旧稿に新たな資料を加え、犬の死体から果樹や農作物が生じたという内容の説話が神ないし人間の死体から有用植物が化生したとするハイヌヴェレ型神話に由来したとする説明は、それがわが国内でのこととするためには無理が多く、むしろ、吉田らの主張する継承論的解釈は、ハイヌヴェレ型神話も、犬の穀物将来神話もあり、さらに犬にまつわる新嘗祭(吃新節)などの習俗も行われる華南においてこそ適当であることを述べ、基本的には狗耕田・兄弟

分家型説話がわが国に伝流し、隣りの爺型をとる花咲爺として国内に流布したとみるべきだとして、旧説を補強した。さらにその傍証として朝鮮半島にも兄弟分家型と同系の兄弟と大型民間説話のあることをあげ、しかも日本・朝鮮および中国のこの話型のそれぞれのバリエーションまでが相互に類似性を具備することを指摘して、花咲爺の外来説を再論した。

つぎに第二の「大歳の客」その系譜」では、花咲爺同様に話型がその諸々の亜型をも含めて隣接国のそれと類似しており、この民間説話の成立もまた移動論によつて解釈されるべきことを説いた。従来、大歳の客型説話はわが国固有のまろうど神信仰と密着して存在しており、この民族的信仰が説話成立の土壌であつたという継承論的起源説がもっぱら行われてきた。すなわち、わが国の大歳の客は宝手拭・弘法機・猿長者・大歳の火などの亜型に分類できるが、同じようなバリエーションが雲貴高原はもとより東アジア各地に伝えられることを示して、この型の説話もわが国には一時期に、一つのルートからの一回限り伝来した説話ではないことを指摘した。さらに、この型の説話は洪水型人類起源神話にもつながりを持ち、おそらく神によつて人間の運命・幸不幸が定まるという神の審判をテーマにした神話に遡及するもので、わが国には少なくとも水稻農耕文化に先がける畑作農耕文化に結びついて伝えられ、のち、隣りの爺型の説話の形で普及するようになったことを説いた。

第三の「大歳の客型伝説とツォタイジ儀礼」では、まず、雲貴高原の真只中の貴州省威寧県板底郷の山村・裸戛で行った現

地調査によつて得た彝族の正月儀礼ツォタイジの概略を述べた。この儀礼は基本的には粟などの農作物の豊穰を祈願する予祝儀礼であり、仮面仮装の村びとが演じる耕作・播種・男女の性交、そして収穫などのかまけわざはわが国の田遊びなどと同類であり、本質的には沖縄石垣島のまろうど神マユンガナシや秋田県その他のなまはげ系の正月習俗にも通じるものがある。しかも、このツォタイジには由来譚として大歳の客型説話が語られていることを指摘し、この新資料によつてわが国の大歳の客型説話がわが国固有のまろうど神信仰に胚胎するものであるとした定説は根本的再検討が必要であることを述べ、大歳の客型説話の研究も東アジアを視野に入れた比較民俗学的研究によつて再構築されなければならないことを説いた。

第四の「伝説と神話―嫁殺し田の場合―」では、わが国の基層文化の重要な一部である稲作文化に係る嫁殺し田型伝説をとりあげた。田植えの折に、田の神に奉仕する早乙女が化粧してヒルモチやオナリの神役を演じてきたが、柳田国男によれば花嫁花婿のヨメの語源はその化粧した女を好女、つまりヨメと呼んだところにあるという。その早乙女であるヨメは田植えの期間中、きびしい禁忌が課せられ、それを犯せば天罰観面だとする堅い信仰があり、それが酷薄な舅・姑によつてきめられた時間内に嫁が苗を植え終わることができず、田圃の中で倒れて死んだとする説話が発生したと柳田は説いた。この言語疾病説もしばしば引用されて定説視されてきたが、この論文でまったく同型の伝説が雲貴高原およびその周辺部の稲作地帯にもあ

ることを指摘して、柳田のエチモロジカルな発生説は一国民俗学の枠内での演繹的解釈であり、根拠のない推測にすぎないことを述べた。嫁殺し田型伝説はおそらくハイヌヴェレ型神話にまで遡及できるであろう。しかし、大林太良らが考えているように、これがハイヌヴェレ型のオオゲツヒメ殺しやウケモチノカミ殺しから転化したりする神話から伝説への継承論は理論的には肯綮にあたるが、わが国の場合にそのまま適用できないことを説いた。嫁殺し田型伝説は外来説話であり、おそらく、わが国には水稻農耕文化と相前後してもたらされた可能性がある。あるいははじめハナシとして伝えられ、のちに特定の田圃の由来説話として伝説化するようになった可能性もあることを述べ、そのそのいずれかは今後の比較民俗学的研究に俟つべきことを述べた。伝説はコトすなわち事物・事象の由来説明としての性格がつよいが、反面、ハナシつまり物語としての側面をもち、コトから遊離して伝流する性質をもっている。神話から伝説への変化はすべて一律ではないことを指摘した。

第五の「西南中国の火把節起源伝説―斉藤実盛虫送り―」では第四の論文と同じく農耕に係る深い虫送り伝説の比較を試みた。斉藤実盛虫送り伝説は田植終了時の田の神送り習俗の名であるサナブリ・サノボリの語が訛つてサネモリとなり、それが稲の切株につまづくなどして悲惨な最期を遂げた老将斉藤実盛の怨霊が害虫と化して作物を荒らすという伝説を生み、それが虫送り習俗の伝説として語られるようになったという言語疾病説が柳田によつて唱えられて久しい。この論文では西南中国

の彝族系諸民族の間に盛んな虫送り習俗と関係する火把節（たいまつ祭）の山來說話を蒐めて分析し、それは本質的には非業の死を遂げた者の怨霊が農作物を害なう小さな虫に化したという伝説であることを明らかにした。そしてその害虫と化した遺恨の主には不幸な老人や婦女もいること、そして同じような内容の伝説はわが国の農村にも語られていることを明らかにし、この型のわが国への伝来も複数次に亘った可能性のあることを指摘した。そして江南地方には宋代以前から、非業の死を遂げた將軍の遺恨が害虫になったという内容の伝説がひろく分布しており、わが国の実盛虫送り伝説はその出現の時期と分布状況から推理すれば、おそらく他の同型伝説よりおくらて江南地方のこの系統の伝説が伝播してきた可能性のあることを説いた。

第二章は農耕文化と並んでわが国古代文化の形成に重要な作用を働いた金属文化に関連した二つの論文と一つの附論から構成されている。その第一の「炭焼長者の構造と系譜」では冶金・鑄造・鍛冶を生業とする人びとの斎き祀った宇佐八幡信仰が炭焼長者型説話の發生母胎であると説いた柳田国男の繼承説を批判した。東アジアに特有のこの話型は初婚型と再婚型とに大別されるが、両型ともその構造・モチーフをまったく同一にするものが中国・朝鮮および東南アジアの一部にあり、国内發生説はこの点からも根拠の薄弱であることを明らかにした。つまり、金属業にたずさわった人びとが信仰してきた金屋子神に關係する縁起譚があり、それが炭焼く窯の周りから金銀を発見したとする炭焼長者型説話と構造が類似していて、その型の説

話が歩き筋の金属業者らによって全国にひろめられたとする柳田説は肯綮にあたるとしても、それはこの型の説話のこの国土内における独特な展開であつて、炭焼長者説話はわが国のオイコタイプに過ぎず、これを遡及して發生論にまで及ぼそうとした柳田の仮説には無理がある。要するに、東アジアにおけるこの話型の主人公の稼業は千差万別であり、総括すれば、貧しい実直な男であることが肝心な点であつて、炭焼は主人公の生業のひとつに過ぎない。中国ではすでに世紀前から人間の運命・幸不幸を左右する灶神の信仰があり、その縁起譚が炭焼長者説話を派生した可能性のあることを述べた。

第二の「溫羅伝説」はこの第一の論文を補足する附論であり、岡山県の吉備津神社の釜鳴神事の由来譚をとり扱った。この由来譚は金屋子神縁起譚、つまり炭焼長者説話と構造を同一にする伝説であり、灶神信仰に関する伝説の一亜型であることを述べた。

第三の「日朝芋掘長者の比較」は炭焼長者説話の亜型である芋掘長者説話をとりあげ、これを通じて、柳田の炭焼長者国内發生説を論難した。つまり、炭焼長者が本来、金属業者の伝承であつたとする柳田以来の見解の有力な証拠は、宇佐八幡宮の所在地である大分地方の方言で、木炭をイモジ（鑄物師）と呼んだことにあるとする。そのイモジがイモと訛り、それから芋掘男をめぐる長者説話が派生したというのであるが、朝鮮半島にも芋掘男の長者説話である薯童伝説があり、一部は早くから歴史化して史書に収録されている。しかもその主人公の名が朝

鮮語で芋に音通し、このタイプの成立もまた、その語彙の訛に基づくとする言語疾病説が唱えられている。すなわち、日本と朝鮮半島において、それぞれの言語から個別にまったく同一内容の説話が偶然に生まれたことになるが、そのようなエチモロジの併立する可能性はあり得ない。日本と朝鮮半島の限られた分布から見ても両者は同一の起源を共有しているものとみなければならない。芋掘は東アジアにひろく分布する炭焼長者型説話の主人公の多様な稼業のひとつとしてとらえるべきであり、その成立を日本国内とする根拠は薄く、この説話もまた東アジア的視野から論究すべきことを説いて、わが国の民俗学がとってきた「限られた地域でのインテンシブな研究」という方法に限界のあることを述べた。

第三章の「外来説話の諸相」はわが国における外来説話研究の case study として、農耕文化・金属文化関係以外の典型的な三つの民間説話をとり扱った。第一の「カチカチ山の比較」では、動物を主人公とする闘争譚を問題にし、とくにカチカチ山を中心にこの動物闘争譚の日本的特徴について述べた。中国西南地方や東南アジアに同一話型の動物闘争譚の多いことをあげ、そこでは虎などの大型野獣とトリックスターの存在の小兎の痛快なものであったものが、虎の棲息しなかったわが国では狸やむじななどと兎とを主人公とする仇討ちの話として普及していることを指摘する一方で、わが国と東アジアのこのタイプの説話はテーマは改変されているが、構造も諸モチーフもほとんど類似しているのみならず、文芸的技巧上にもとうてい偶然とはいえない

ない一致の見られるもののある事実を指摘し、民間説話の比較研究は話型やモチーフの比較にとどまらず文芸的技巧の比較にも及ぶべきこと、これによって系統論がいつそう説得力をもつことを説いた。

第二の「桃太郎の故郷」は五大昔話の代表格であり、百年以上の研究史をもつ桃太郎の成立について新説を述べたものである。画一化を見る以前の桃太郎の原形をめぐって幾多の臆説が唱えられたが、みるべきものに柳田説と関敬吾の説がある。柳田はこの昔話の成立を異常な出生をする小さ子神の信仰からの継承説で説き、三匹の動物の助っ人や怪物退治は後次的増幅であり、とくに桃の実からの誕生というモチーフも後世の変化に過ぎないことを力説した。これに対し関は逆に主人公の異常な誕生は重要ではなく、むしろ、助っ人の不思議な仲間モチーフと求婚譚がこの昔話の古い形であるとし、源流を古代ギリシャのアルゴナウテン説話に求むべきこと、この話型はわが国にはすでに記紀編纂以前に伝来しており、神武東征物語はその歴史化された姿であるという伝播説を唱えた。しかし、ギリシャ神話よりも古代インドのマハーバーラタはわが国にはるかに近く、しかも異常誕生・不思議な仲間・難題求婚の主要なモチーフを含んでおり、桃太郎の原形により近いことを述べた。しかし、桃太郎の直接の祖型は、桃の実からの小さ子の誕生と異常な成長・不思議な仲間および難題求婚のモチーフを具有している、より内容の類似する説話に求むべきであることを述べ、そのうえで、中国には不思議な仲間が単独で、あるいは複合説話とし

て多く分布していることを指摘し、さらに、桃の原産地であり、桃に関わる信仰や習俗の多い中国に桃その他の果実から誕生する小さ子説話があり、そのひとつとして貴州省の桃の子太郎をあげた。これは桃から生まれた小さ子が怪異な存在が課す難題を解決して、その娘と結婚するという内容の説話であり、これがわが国の桃太郎の直接の祖型ではないとしても、それに近い伝承であることを述べ、そのうえに立つて、比較研究は、より歴史的關係のある、より隣接した地域との、より類似した内容の説話との比較が有効性をもつことを説いた。

第三の「継子の井戸掘り」では、わが国社会に移植された海外の説話が一部未消化のまま伝えられている民間説話の事例としてとりあげた。本来は民間伝流の難題求婚譚が史実化されて『孟子』や『史記』など中国古典に堯舜禪讓物語の主要部を構成する舜の迫害物語となったもので、それが沈降して再び民間説話となり、それがわが国に伝えられたものであることを説き、その痕跡が太春とかしゃいんあるいは、すんという意味不明な主人公の呼び名に名残りをとどめていることを指摘し、外來說話がわが国社会に受容され、わが国の民間説話として成熟する過程のひとつの事例とした。

以上でわが国民族文化の重要な基盤となった農耕文化ならびに金属文化に関連する主要なる民間説話をとりあげ、いずれも隣接する東アジアからの外來說話であったことを明らかにした。これらの説話は農耕文化や金属文化の伝来と相前後して、しかもおそらくその多くは当該文化の伝来に際して、関連する技

術・信仰・習俗などとともに複合文化の一環としてわが国にもたらされた可能性がある。

従来、わが国を代表するこれらの民間説話は民間の口頭伝承であるがゆえに、その発生をいわゆる「常民」生活のなかに尋ね求められてきた。つまり、説話の成立が「まろうど神」や「小さ子神」などの信仰やそれに関連する習俗、あるいは記紀などの古代神話に由来するという継承説によって解釈されるか、さもなければ、言語の疾病に起因するとみるエチモロジによって説明されてきた。

しかし、わが国の民間説話は技術や物質文化、あるいは諸制度の研究領域に較べて、その発生論的研究において比較研究の視点が欠落しているか、あるいはきわめて稀薄であるのが実情であった。東アジアにおけるわが国の歴史的・地理的位置、とくに基層文化形成の歴史的経緯を深刻に省察し、しかも、本論でとりあつたわが国の主要な民間説話の類型と構造、および構成のモチーフ、さらに一部に文芸的技巧すら伴う同類の説話が隣接の諸地域に豊富に存在することが明らかになってきた事実をもってすれば、東アジアを視野に入れた民間説話の比較研究はもはや当為のことといわなければならない。

外來說話である昔話・伝説類がわが国社会に受容され、民間で伝承されてきた以上、当然、説話の社会的適応が進展してきたことを意味する。そのような性格の民間説話を、従来のように民俗学的アプローチによって、その発生論にまで遡及するならば、継承説が生まれ、国内自生説が成立することは理の当然

であろう。したがって、これまでの研究成果の問題点は多くが方法論そのものにあつたといわなければならない。

わが国神話の比較研究の意義について、すでに『日本神話と中国神話』などによって述べてきたが、民間説話においてもそれは同様である。ただし、比較研究に走るあまり、短絡的研究に陥らないよう努めなければならない。「時間的・空間的により隣接する説話、より類似する内容の説話」との比較が、比較研究にとって肝要であるからである。このことはわが国の民間説話ほどにインテンシブな調査研究が進展しておらず、したがって、質・量ともに豊富な資料の蓄積がまだ進捗していない諸地域との比較においてはなおさらである。しかしながら、本論で扱った比較の対象は、わが国とまったく空間的に接壤し、歴史的にももともと交流・接触のあつた東アジア諸地域の説話であり、しかも、それらと関連をもつ技術・信仰・習俗などにも共通点が認められており、比較研究の価値は他地域とのそれに増して高いものがある。今後はより質の高い、より量的に豊富な比較資料を蒐めることによって、東アジア民間説話の比較研究の意義を高揚していきたい。そしてこのような比較による相互照射によってわが国の民間説話のみならず、東アジア各地の民間説話の研究が新しい展開を遂げるものと信じる。

最後に、わが国民間説話の成立と特色とをさらに解明していくために、今後ひとり民間説話にとどまらず、他の民俗事象をも含む複合的な比較民俗学的アプローチを推進していくならば、それによっておのずから、わが民族文化の研究に新しい側面

がひらけ、民族文化の特質が鮮明にされていくことが期待できるであろう。

論文審査の要旨

此度、伊藤清司君によって提出された学位請求論文は、東アジアの昔話、伝説を比較研究した『東アジア民間説話の比較研究』を主論文とし、中国の古書『山海経』を中心資料にして先秦時代中国の民衆生活の再構成を試みた『中国の神獣・悪鬼たち——山海経の世界——』（東方書店 一九八六年七月刊）を副論文とするものである。

○『東アジア民間説話の比較研究』

本論文は全体を三つの章に分ち、第一章を農耕文化に関連する主要な民間説話の研究に、第二章を金属文化に関連する代表的な民間説話の研究に、そして第三章を農耕・金属両文化関係以外の代表的な説話の研究にあてている。

すなわち、第一章「農耕文化と民間説話」において具体的に組上にのぼるのは、論者がわが国民間説話花咲爺の祖型に擬している雲貴高原のイヌを主人公とする狗耕田・兄弟分家型説話。大歳の晩に訪ねてきたみすばらしい未知の客を、貧しいが情深いものが快く泊めて歓迎すると、翌朝その客が黄金に変わる、または金銀を残して立ち去るというモチーフの説話。田植え中の女が死んだ田圃の由来を語るわが国の嫁殺し田伝説と同系と見られる、雲貴高原とその周辺の稲作地帯に分布する姑娘田、媳婦田の伝説。そして農耕と関係の深い虫送り伝説、とりわけ

非業の死をとげたものの冤魂と害虫の關係を説く説話である。

また第二章「金属文化と民間説話」において具体的に論じられるのは、貧しい炭焼男が訪ねてきた高貴な女と夫婦になり、コガネ（黄金、粉鉄、黒金）の価値を教えられて長者になった炭焼長者譚と、東アジアのそれと同じ、もしくは類似する話型、吉備の温羅伝説、わが国と朝鮮半島に集中して認められる芋掘長者の話である。

さらに、第三章「外来説話の諸相」では、カチカチ山、桃太郎、継子の井戸掘り、以上三つの説話が具体的に論じられている。

これに先立ち、論者は冒頭の「序にかえて」において、わが民族固有の信仰、習俗、神話を母胎として民間説話が成立したとする柳田国男以来の研究動向に疑問を提示し、一国民俗学の枠を破り、広く東アジアに分布する説話と比較研究を展開することによって、わが国民間説話の成立に新しい視座が開けるとしている。

わが国における説話研究史の上に立つて、本学位請求論文が殊更注目されるのは、東アジア民間説話の比較研究が最も今日的な課題であり、しかも焦眉の急の問題であるからである。それは他でもない。わが国民間説話の研究史にあつて、積年の懸案の一つとなっていたのは、「遠く的一致、近くでの不整合」であつた。このため斯学の先学たちは、早くは南方熊楠にはじまり、高木敏雄、松村武雄、中田千畝、近くは関敬吾に至るまで、わが国に行われる昔話や説話、伝説の源を探つて、話の故

郷をインドに求め、あるいはその照合をドイツ、フランス、さらにはイギリスやフィンランドに求めた。

一方、かかる風潮と思想を抑制し、かつは幾分批判しつつ、柳田国男は、いましばらく一国民俗学に拠るべきだとして、この島国独自の在りように目を向けるべく積極的に説いて止むことがなかったのである。

この「遠く的一致、近くでの不整合」の一因は案外はつきりしていて、行き着くところ、近隣諸国間とりわけ東アジア圏内での資料整備の立ちおくれと、根本には実はこの種の学問に向けての認識不足にあつた。しかし、解放後になってから、中国では三大民間故事（昔話、伝説、歌謡及び諺）の収集と整理が急速に進展するようになった。東アジア圏民間説話比較研究の黎明と評価しても過言ではない。この時に当たつて、東アジアの民間説話と、わが国に行われているそれとを組上にのぼせ、あくまでも西南中国少数民族のなかに、日本昔話のみならず、広く日本民間説話の源流をたずねようとする論者の基本認識、ならびにそこでの理念は、「遠く的一致、近くでの不整合」を矯正する上ですこぶる有効であることは言を俟たない。

論者の新鮮にして刺激的な話題に富む学問研究は、こうした学史の延長線上にあり、本学位請求論文の提出にさきがけて、今日まで間断なく進められてきたといえる。日中相互間に関連を見る特定神話の構造的比較研究である『日本神話と中国神話』（学生社、一九七九年）に示された論者の視座と方法は、神話のみならず民間説話の世界にまで及んでおり、「日中説話

の類似」といった視点は、併せて両国間における「伝承」と「伝播」という大きな課題を引き出しているのである。さらに、こうした論者の関心と方法は、別著『花咲爺の源流』（ジャパン・パブリッシャーズ、一九七八年）によってほぼ極まったとみてよい。かくのごとく、ここに学位請求論文として設定された『東アジア民間説話の比較研究』の標題は、論者のなかにあつて早くから胚胎し、確実に助長されて今日に及んだと理解されてしかるべきである。

本論文の特色をなす一つは、前述したように西南中国の少数民族を祖上にのぼせた点にある。顧みて、中国本土と日本との比較研究は、その殆んどが漢族の文字文化圏との対照にあつた。それらは、しばしば書斎での、机上での作業も可能であつた。これに対し、本論文の基本姿勢は根本的に違つており、民間説話の本質が元来無文字社会における口頭の伝承であるとする認識にもとづいて、少数民族の社会を直接基盤に据えた点にある。当然の帰趨として、そこでの手続きと作業は、書斎を出て現地に赴くフィールド調査であり、またフィールド調査成果の活用である。

化身して来訪する神を厚遇するものが神の報いに浴するといふ「大歳の客」型説話に対応する民間説話を、貴州省黔南布依族苗族自治州興義県、同惠水県の各布依族、広西壮族自治区竜州県の壮族、雲南省西双版纳傣族自治州の傣族、広東省連南瑶族自治县の瑶族などの伝承に求めた「大歳の客」その系譜――、貴州省の西北部、標高二八〇〇メートルの山の傾面にあ

る裸叟村に僅かに残る彝族の正月行事ツォタイジ儀礼の由来譚を分析し、この儀礼が大歳の客系統の説話を論ずる上でも、またわが国固有の信仰とされるまろうど神信仰の本質を再検討する上でも、きわめて注目すべきことを論じた「大歳の客型伝説とツォタイジ儀礼」、さらに「伝説と神話―嫁殺し田の場合―」、「西南中国の火把節起源伝説―斎藤実盛虫送り―」の各論は、その意味では論者の両目躍如としており、従来の単なる観念論的な比較研究の枠を大きく越えた論文として出色である。

その間、論者の筆勢はしばしば柳田国男説の批判に及ぶが、それは短絡的な柳田批判ではない。これの根幹は、実はわが国内にあつても、元来がフィールドワークとは無縁であつた柳田国男の方法論それ自体への批判に通じているからにはかならない。また西南中国の彝族系諸民族の間で盛んな虫送り習俗と関係する火把祭を分析した論述中で、田植え完了後に営む行事名（サナブリ、サノボリ）が転訛してサネモリとなり、それが稲の切株につまづくなどして悲惨な最後をとげた老将の怨霊が害虫と化し作物を荒らすという伝説になったということ（一五七、一六七頁）をはじめ、柳田の言語疾病説的解釈を重ねて退けるのも、民間説話の成立をわが国内の民間習俗、信仰から説こうとする方法論が生む当然の帰結であるとするからである。

フィールドワークに加えて、他に第二章の「炭焼長者の構造と系譜」、「温羅伝説」、そして「日朝芋掘長者の比較」にそれぞれ顕在化のごとく、論者はつねづね文献資料をも博搜しており、それに拠つた場合の手立てにはまことに手堅いものがある。

る。基本的には構造論の手法である。その点、沖縄を中心とした南島の民間説話を扱った、第三章の「継子の井戸掘り」も同じであり、継母の虐待による死の危機を脱して裕福に暮らすようになった継子の話が、『孟子』万章篇上や『史記』五帝本紀などの中国古典の伝える著名な「堯舜禪讓」伝説のなかの「舜の迫害譚」とほぼ同一構造、同趣旨の伝承であり、いわゆる「唐話」とは意識されない民間説話の沖縄伝来を指摘したものである。

伊藤論文の要諦は、中国西南少数民族の民間説話という新しい視座を提供し、かつ、わが国に行われるそれとの「類似」を詳細に論じようとするところにある。ところで、それにさきがけて、この少数民族に向けての論者の理解と認識は、基本的には本編第一章に示されている。要はより高次の文化を擁する「強力な漢民族の南下」を受けて、圧迫された「先住の弱小な集団」は、「さらに僻地に追いやられるといった」一種の「球衝き現象」(二〇頁)の結果、現状を招来したと理解されているようである。

従って、上にかかわって、改めてここに生じる疑義の一つは、たとえば「さらに僻地に追いやられるといった」、そのような「先住の」より「弱小な集団」に内に留まった類の文化が、何故、あるいはどのような経過と経路を辿って、ひとたびはその「僻地」たる高地を出立し、さらには遙かに遠く海を渡ってこの島国に到達しえたのか。つまりは「伝流」するのが叶えられたのか、とするごく素樸な質疑である。

すなわち、このようなばあい、仮にも、一段と高次の文化を擁する漢民族のそれが、他の多くの文物ともどもわが国に渡来、もしくは「伝流」し、これが端緒となって漸次国内に「移動」「伝播」していった、それがために彼我の比較が可能であると説くならば、事はすこぶる簡明であり、説得力は強い。ところが、本論文にあつては、その設定が「西南中国少数民族」内での、しかも無形の言語伝承というだけに、実はこの「伝流」の実態がいかに予想され、かつ予測されているのか、この部分が不分明なままに終わっている。

以上、伊藤清司君の論文は、民間説話伝流に関する理論構築、個別的民間説話、伝説の更なる通文化的比較、分析など、残された課題も多いが、東アジアの広域にわたり、永年の歳月と情熱を傾けて民間説話、伝説を考察したものであつて、随所に説得力のある新見が認められ、現今における民間説話研究の一つの到着点を示しえた、高く評価できる。

○『中国の神獣・悪鬼たち——山海経の世界——』

副論文として提出された本著は、秦漢時代以前に原形が生まれていた古書であり、前漢末の劉向・劉歆父子が整理し、解題をつけ、体裁をととのえた『山海経』に関する研究成果である。漢族の内なる村落共同体の空間が膨張するのに伴って、それを取りまく外なる野生の空間で相対した超自然の形態、生態を理論化することによって、先秦時代の民俗社会を再構成したものである。中国各地の山林川沢に棲む怪力乱神、ならびに野生の猛禽獣を扱いながら大胆な推断をさけ、着実な手法によつ

て『山海經』の世界を解明しているが、同書に頻出する薬草を「服す」という語の解釈について、服むのではなく、文字どおり身体の外側に服おびることと説明されたのは、伊藤清司君ならではなしえない新説である。本書Ⅲ章の「内科・外科の薬物」、「懐妊・避妊の薬物」、「家畜用の薬物」はこのような新しい知見に満ちていて、本草学史の研究に重要な一石を投じたということができ、また広く古代史研究の後学に益するところも大なるものがある。

以上の審査結果により、同君が文学博士の学位を受けるに十分値すると判定するものである。

平成三年三月七日

論文審査担当者

主査 可児弘明（慶應義塾大学文学部教授文学研究科委員）

副査 三木 亘（慶應義塾大学文学部教授文学研究科委員）

副査 野村純一（國學院大学教授文学博士）

学力確認担当者

三木 亘（慶應義塾大学文学部教授文学研究科委員）